

青べか物語

映画文学人生論

原作：山本周五郎（1960年）「文藝春秋」
監督：川島雄三(1962年) 脚色：新藤兼人
出演：蒸気河岸の先生 森繁久弥 撮影：岡崎宏三
芳じいさん 東野英治郎 音楽：池野成
おせいちゃん 左幸子 五郎ちゃん フランキー堺
船宿の息子 長 矢野間啓治 きみの 乙羽信子

人はなんによつて生くるか

葛飾の青べか村をはじめて訪れ、船宿から舟を借りて、はぜ（鯊）釣りをしたのは昭和三十九年の秋。おぼろげな記憶では総武線錦糸町駅からバスで十分近くかかった。地下鉄東西線や京葉線の便はなく、陸の孤島のような村だった。当時の私は山本周五郎の小説に関心がなく、何も読んでいない。『青べか物語』が映画化されていることも知らなかった。

しかし、やがて、沖の百万石と呼ばれる沖合が埋め立てられ、宅地開発が進んで、首都圏のベツドタウンに変貌した。都心から私のような住宅難民が大挙して押し寄せた。

昭和五十五年の春のことである。そのとき、これも他生の縁と思ひ、小説を読んだ。川島雄三監督の映画はまだ観る機会に恵まれていない。今のところは、まぼろしの映画だが、村の図書館にはフィルムが保存されているという。そのうちに観る機会に恵まれるかもしれない。

映画を観れば、原作の理解が深まることもあると思う。小説の活字を読むことによつて脳が受けとめる印象と映像や音楽が感覚に訴えかけてくる印象との違いを比較することもできる。

たとえば、作者山本周五郎の分身ともとれる蒸気河岸の先生が根戸川で釣りをしていると、五十年配の男から呼びかけられた。「人はなんによつて生くるか」。それは、学んで覚えた言葉ではな

青べか物語

映画文学人生論



い。けれどもそれは出稼ぎにいつていた留守に妻と四人の子を一度に失った男（ささやん）の言葉だ。人はなんによって生きるか。家族？みんななくなった。仕事？やる気がしない。希望？何もない——小説では考えさせられるところだが、映画ではどう扱われているだろうか。

郷土博物館で聞いた話では、映画は地元では評判が悪く、早々に上演中止になったという。映画が原作の理解を深める場合もあれば、一方、原作のイメージを歪めてしまう場合もある。『青べか物語』の場合は今のところは何ともいえない。

蒸気河岸の先生は芳じいさんから老いぼれ馬のようなべか舟を買わされる。悪童たちはべか舟に石を投げ、泥を投げて、悪罵と嘲笑をあびせかけた。船宿「千本」の息子で、小学校三年生になる長（ちょう）だけはべか舟を擁護してくれたが、三十年後に先生が訪れたとき、四十一歳の長は先生のことを思いだしてはくれなかった。

平成二十三年の今は、そのときからさらに五十年の歳月が流れている。原作者の山本周五郎（一九〇三〜一九六七）、監督の川島雄三（一九一八〜一九六三）、主演の森繁久弥（一九一三〜二〇〇九）はもうこの世にはいない。まだ生きている私は根戸川の堤防沿いを歩きながら、時々つぶやく。人はなんによって生きるかと。

人はなんによって生きるか鯨に問う